

子育てアドバイザー（ラジオパーソナリティ）金子耕式氏が

保護者に贈る とっておきの話

子育てトーク No. 13



◆◆◆ほめてやる気を出させる◆◆◆

従業員の努力やアイデアを積極的にほめる経営者と、ミスや不備を見つけてはしかりとばす経営者では、どちらが成功を収めると思いますか。

20年ほど前にアメリカで出版された「一分間のマネージャー」という本の中で、著者のスペンサー・ジョンソンさんが書いています。「良いことをしている従業員を見逃すな。努力している従業員を見つけてほめなさい」と。人は、ほめられたり評価されたりすると、持っている力を精一杯発揮するし、自分を認めてくれる会社や上司のためには何でもしようと思うものです。だから、「経営者が会社の利益を思うなら、従業員の良いところを積極的にほめなさい」と言うのです。

このことは、子育てにも当てはまります。子どものことでいつも頭を抱えている親御さんがいたら、発想を180度転換してください。お子さんの良いところを見つけて、積極的にほめてほしいのです。

私の友人はある時、褒めることの大切さに気付いて、そのときから、一日に最低2回は子どもの良いところをみつけてほめるようにしたそうです。「えらいねー、言われなくても歯を磨けたね」とか、「宿題やってるのか、えらいね」とか、なんでも良いのです。しばらくすると、子どもの表情や行動に大きな変化が現れたそうです。彼は言いました。「子どもを育てる時、ほめることと叱ることの割合は10対1、いやもしかしたら100対1でいいのかもしれないな。」



◆◆◆無条件の愛が・・・◆◆◆

子どもの頃、優秀な兄の下で特大の劣等感を抱えて生きていた私が、今こうして曲がりなりにも積極的な人生を歩めるようになったのは、他でもない母の無条件の愛情のおかげだと思っています。

私は、中学3年の春まで学業成績が極端に悪く、僕なんて何をやってもダメなんだと半ば諦めて暗い人生を送っていました。だから、私は勉強ができない子どもの気持ちが痛いほど分かります。そういう子どもは「自分は悪い成績を取りたくて取ってるわけじゃない。でも僕は生まれつきダメなんだ」と決め込んでいるのです。そういう劣等感の強い子には、何よりも親の積極的な関わりと無条件の愛情が必要なのです。親は子どもの将来を思うとついつい不安にかられて、子どもを責めたり叱ったりしてしまいがちです。



でも、私の母はまったく違いました。「耕式は大丈夫！お母さん分かっている。あなたは遊ぶ時もお手伝いする時も夢中になってするでしょう。あれほどの集中力があれば、いつか勉強に興味を湧いた時に、一気に挽回できるってお母さん信じてる。だからちっとも心配してないわよ」と何度もくり返し励ましてくれました。当時の私は、それはただ我が子が可哀想だから慰めてくれているだけだと思っていた。それでも、母のその言葉は、まるでボディブローのように心に深くしみ込んでいたのです。母はどんな時でも、どんなに学校の成績が悪くても、いつも私の味方でいてくれました。母のその無条件の愛があったからこそ、今の私があるのです。そして母が無条件の愛をもって育ててくれたからこそ「ファミリー・トーク」というラジオ番組が生まれ、今、こうして皆さんにも子育てについて語る事ができるのです。

その母ですが、残念ながら3年前の12月9日に83歳で亡くなりました。あの日、私は北海道の知床に近い大空町の中学校でその年の最後の講演会を終えて、猛吹雪の中を千歳空港を目指して必死に車を走らせていました。でも、間に合いませんでした。急性肺炎のために病床にあった母は、自分の命のことよりも、息子である私が無事に講演会を終えることができたかを最後まで案じていと知らされ、涙が止まりませんでした。誰にとっても母親というのは大切な存在ですが、私にとって母はまさに特別な存在でした。

この紙面は、下府中小学校PTA家庭教育講座として、連載をいただいています。